初句切れの表現構成
－古今和歌集から後拾遺和歌集まで－

小池　博明

1. 糸井通浩氏の句切れ論

平安時代の和歌について、表現を句切れの本質と関係づけて説いたものは、これまでほとんどないと思われる。最近では、句切れの研究そのものが盛んとは言えないだろう。

そうした中で、句切れの本質に立脚して、1首の表現構造を説いた糸井通浩氏の説[1)]は注目される。まずはその本論に関わる部分を紹介する。

糸井説では、句切れは短歌形式の成立に応じて次のように出来たとする。すなわち、長歌形式は、5音句と7音句の繰り返しからなる。したがって、5音句と7音句（または逆の7音句と5音句）がひとまとまりになるという規制はあるが、それを何度繰り返すかは自由である。これに対して、短歌形式は5・7・5・7・7という全体量は規定されたが、部分的なまとまりをどうするかは、自由になった。この部分的なまとまりが、すなわち句切れである。たとえば、5・7・5と7・7とでまとまれば、3句切れということになる。

このように考えると、短歌形式では、句切れをどうするかということは、1首の表現構成と深く関わることになる。糸井説が強調するのは、句切れによって生じる短歌内部の対立構造である。長歌形式は、序詞から本旨へ、あるいは自然から人事へと展開する流動的な構成だが、短歌形式では、全体量が31文字に固定したことにより、意味的な対立構造が工夫されるようになった。それが反映されたのが、句切れと考えるのである。

2. 問題の提起

さて、周知のように万葉集・古今集・新古今集の比較では、2句切れ・4句切れは万葉集の特徴であり、3句切れは古今集と新古今集の、初句切れは新古今集の特徴である。つまり、初句切れは、句切れの中で一番成熟が遅れた。それが原因なのか、句切れの研究でも取り上げられることが最も少ないようである。

そこで、本発表では、和歌内部の対立構造が作り出す緊張関係という観点から、述語文節1つで構成される初句が、第2句以下で示される述語の内容や対象に焦点を絞るとともに、1首の印象を決定づけるという初句切れの表現構成を、古今集から後拾遺集までの勅撰集を資料として明らかにしたい。

後拾遺集までとするのは、そこに初句切れの表現に画期の1つがあることと、新古今集の原型がこの時点で出来上がったと見るからである。

なお、句切れの認定にはいくつか考え方があるが、ここでは最も客観的と考えられる文法的な文の切れ目を、句切れと

する。また、今回は問題が複雑になるのを防ぐため、初句切れは、初句のみで切れる歌に絞り、初句以外にも句切れをもつ歌は扱わない。

3. 初句切れの成熟の遅れ

さて、初句切れは、新古今集の特徴とされるように、3句切れに比べて成熟が遅れた。これは、初句切れが短歌内部の対立構造を作るのが難しかったことに、原因の1つがあるだろう。3句切れは上句と下句が量的に拮抗し、独立した2つの文を作ることが容易なため、対立構造を作りやすいと考えられる。

〔資料1〕

桜のごととく散る物はなしと人の言ひければよめる

桜花とく散りぬとも思ほえず／人の心ぞ風も吹きあへぬ（古今・春下・83・紀貫之）[2)]

資料1は、桜のようにはやく散るものはないという、ある人の言葉に対して詠んだ歌である。「桜がはやく散ってしまうとも思われない」という上句も、「人の心はまあ風が吹き過ぎる間もなく移ろってしまう」という下句も、ひとまとまりの独立した文であることから、対立が生み出される。これを結びつけるのが、ある人の言葉への反論（上句）に対する、事由の説明（下句）という論理関係になる。別個の2文は読み手が関係づけなくてはならないから、そこに緊張が生まれるわけである。

ところが、初句切れでは、初句と第2句以下とでは量的に不均衡が生じる。この量的な差は、当然質的な差に結びつく。

古今集から後拾遺集までの初句切れの歌は、私の調査では合計61首で、初句に体言はほとんど含まれない。資料2は、初句切れが急増した後撰集の用例の内、初句に体言を含むものである。

〔資料2〕

（要求文）

物いひける女に、蝉の殻を包みてつかはすとて

これを見よ／人もすさめぬ恋すとて音をなく虫のなれるすがたを（後撰・恋三・793・源重光）

（判断文）

男のもとにつかはしける

人はいさ／事ぞともなきながめにぞ我は露けき秋も知らるる（後撰・秋中・287）

返し

人はいさ／我はなき名の惜しければ昔も今も知らずとをいはん（後撰・恋二・634・おほつぶね）

返し

人はいさ／み山がくれの郭公ならはぬ里は住み憂かるべし（後撰・恋五・951・大輔）

要求文や判断文という文の種類は、初句についてのものである。なお、文の種類については後に触れる。

判断文3首の「人はいさ」は、「人はいさ知らず」の述語「知らず」が省略されたものである。これから述べることに関わってくるが、初句の述語が省略されるのは、初句切れでは例外的である。そうした例は「人はいさ」しかないし、後撰集以後この用例も消えてしまう。したがって、後撰集では実質的には体言を含む初句は、793の1首だけである。

拾遺集にも1首（403）あるが、これは物名歌で特殊といえる。後拾遺集では、

34首中2首（339・614）のみである。

それでは、体言を含まない初句はどのような形になるのか。

〔資料3〕

久しうあはざりける女につかはしける

思ひきや／あひ見ぬことをいつよりと数ふばかりになさん物とは（後撰・恋二・668・源信明）

この歌は、長く会わなかった女に男が贈った歌で、初句で「思ひきや」、すなわち「以前は思っただろうか、いや思わなかった」と言い切る。その内容が、第2句以下で「あなたに会わないことを、いつからかと、数えるほどになろうとは」と示される。歌末の「とは」が、第2句以下が初句の内容であることを明示する。

このように、初句切れの初句のほとんどが、1つの述語文節からなる1文となる。量的な規制がこのような文の形態に反映したと考えられる。

したがって、初句切れの初句は1文とはいっても、第2句以下の第2文とは、3句切れと同じような対等な1文による対立構造にはならないのである。このことが、初句切れの成熟を遅らせた原因の1つと考えられる。

4. 初句切れの表現構成

4.1 初句の表現

それでは、初句と第2句以下との対立構造は、どのように構成されるのか。

ここで思い出されるのが、早くに山崎孝子氏が、新古今集の初句切れについて、初句の多くが命令・依頼・禁止・疑問・詠嘆の表現をとると指摘されたことである[3)]。しかし、私の調査によれば、これは新古今集だけの特徴ではない。

〔表〕

	要求文	感動文	判断文	計
古今集	1(50.0)	0(0.0)	1(50.0)	2
後撰集	4(40.0)	1(10.0)	5(50.0)	10
拾遺集	5(33.3)	6(40.0)	4(26.7)	15
後拾遺集	19(55.9)	7(20.6)	8(23.5)	34
新古今集	20(37.7)	19(35.8)	14(26.4)	53

＊（　）内は、それぞれの歌集の合計に占める割合。

まず、〔表〕の文の種類について説明する。文の種類については諸説あるが、ここでは塚原鉄雄説[4)]に従って、分類した。塚原説を用いるのは次の理由からである。

塚原説は、話し手の表現意図が文末の述語形式に特徴的に示されることから、文の種類を文末形式に基づいて分類したものである。山崎氏が指摘した命令・依頼・禁止・疑問・詠嘆はまさに作者の意図だから、塚原説はここで明らかにしたいことに直接関わる。また、用例に古文も取り上げて、文末形式の実際に即した分類で、実践的である。

さて、塚原説では、文の種類を、その表現意図から、判断文・要求文・感動文の3つに大別する。

判断文とは、話し手の素材に対する判断を表す。文末形式は、用言やほとんどの助動詞の終止形（係り結びの結びでは、連体形または已然形）などになる。

要求文とは、話し手が聞き手に実行や判断を要求する文で、さらに疑問文・命令文・禁止文・願望文に分けられる。文末形式は、疑問文が疑問の係助詞の結びになる連体形、疑問の意味を表す終助詞となる[5)]。命令文では、活用語の命令形などになる。禁止文では、禁止を表す終

助詞などである。願望文は、希望を表す終助詞や助動詞となる。

感動文とは、話し手の素材に対する感動や詠嘆によって統一された文である。文末形式は、体言、形容詞・形容動詞の語幹、活用語の連体形、詠嘆の終助詞などになる。

なお、要求文に属する疑問文には、相手に質問する場合と、自らに問いかける疑問（自問）とがある。疑問（自問）は、話し手が聞き手にもなって、話し手自らに判断を要求すると考えられる。

また、疑問文には反語がある。反語の意味は話し手の強い断定である。つまり、話し手が自己の判断に強い確信をもっているわけである。しかし、それにも関わらず、疑問の形式で話し手と同じ判断を聞き手に要求する。相手に判断を要求するという表現意図からは、反語も要求文に属するとしてよい。したがって、ここでは反語も要求文として処理した[6)]。

そこで、山崎氏の指摘された命令・依頼・禁止・疑問・詠嘆は、塚原説では要求文（命令・依頼・禁止・疑問）と感動文（詠嘆）ということになる。

〔表〕に明らかなように、新古今集と同じように、拾遺集・後拾遺集で7割以上が要求文と感動文になるのが注目される。

もちろん、3句切れの第1文（上句）にも要求文や感動文は現れる。ただし、初句切れの第1文（初句）とは、表現に関わる大きな相違点がある。

〔資料4〕

鳴きわたる雁の涙<u>や</u>落ちつらむ／物思ふ宿の萩の上の露（古今・秋上・221）

〔資料5〕

（はじめて女の許にまかりて、あしたにつかはしける）

あひ見ても猶なぐさまぬ心<u>かな</u>／いく千代寝てか恋のさむべき（拾遺・恋二・716・紀貫之）

資料4の第1文は、文中に係助詞「や」のある疑問文、すなわち要求文である。資料5の第1文は、文末が詠嘆の終助詞「かな」で、感動文である。

このような3句切れ（2句切れ・4句切れも同じように考えて良いだろう）の第1文の要求文・感動文と初句切れの初句との違いは、体言があるかないかである。体言がある3句切れの第1文では、用言の対象が体言で示されているので、表現主体が何についてどのように把握したかが明らかである。

資料4は、鳴き渡る雁の涙が落ちたのだろうかと疑問の形で詠み、資料5（初めて会った女に贈った後朝の歌）は、会っても依然として満たされない、自らの心について詠嘆する。ここには既に古今集的表現の特徴である、物事を理知的に捉えることが現れている。すなわち、資料4では、あるはずのない雁の涙をあたかも現実にあるかのように詠む。ここでの疑問は、秋本守英氏の言葉で言えば、形ばかりのポーズにしか過ぎない[7)]。資料5では、恋い焦がれていた女に初めて会って思いを遂げたのだから、本来は心が満たされるはずだという前提が言外にあり、それと自分の満たされない思いが矛盾している、そういう理屈と心情の齟齬を捉えている。

このように、物事を理知的に捉える第1文すなわち上句が、第2文すなわち下句とさらに理知的に関係し合って1首が

構成される。

資料4の第2文では、雁の涙は、萩に置いた露だったと種明かしをして見せる。資料5の第2文は、上句で示された齟齬の理由を、一晩だけの逢瀬だからなのだと数量の問題にすることで解消しようとして、「いったいどれほど寝たら、自分の恋しい思いは冷めるのだろうか」という下句が導かれる。それは、相手の共感を得るようにはたらく。

この共感は、反語を表現する係助詞「か」が生み出すものである。「どれだけ回数を重ねても恋しさは冷めない」という確信が表現主体にはあり、それを聞き手に疑問の形で問いかけることで、表現主体と同様の判断を要求する。ここに、表現主体と聞き手の間に強い共通認識が成立するのである。むろん、こうした表現が成立するには、両者が相思相愛の仲だという場面が必要なのだが。

このように、物事をどのように理知的にとらえるかが、古今集的表現の特徴であり、それは今見たように、判断文ではない、要求文でも感動文でも同じことなのである。そして、物事をどのように理知的にとらえるかを表すには、当たり前のことだが、対象となる物事がはっきりしている必要がある。

ところが、先に述べたように、初句切れでは、事物を表す体言がほとんどの場合含まれない。このことは、初句切れの表現構成が、今見てきたような3句切れなどに見られる、典型的な古今集的表現と異質であることを推測させる。

そもそも古今集的表現の焦点である何をどのように捉えたかの「何を」がないから、「どのように」を表すことができない。また、初句が体言を含まない、要求文と感動文であることは、初句に込められる表現主体の思いの強さが強調されることにもなる。

実際に、古今集から拾遺集までの初句切れの用例を見ると、要求文で体言を含むのは、資料2にあげた後撰集の793「これを見よ」、拾遺集の403「何とかや」くらいである。先述したように、この2首は初句切れとしては特殊な用例である。これを除けば、拾遺集は「いかにせむ」(575・642)か「思ひきや」(771・907・1285)である。

後拾遺集では、「いかにせむ」「思ひきや」に、「思ひやれ」(66・413・444・451・561・726)、「思ひ出でよ」(484)、「思ひ出づ(や)」(560)という「思ふ」を構成要素とする動詞が目立ってくる。

「いかにせむ」は、「どうしようか」と戸惑う気持ちや「どうしようか、いやどうしようもない」と諦めを表す。「思ひやれ」「思ひきや」「思ひ出でよ」「思ひ出づや」の「思ふ」は、何かについての心の働きを表す。いずれも、何かについて心の動いていることが、疑問文や命令文で表されているのに、心が何について、どのように動いているのかわからない。それだけに、表現主体が何か強い思いを抱き、聞き手に働きかけようとしているという思いだけが、強く表出されることになる。

感動文について言えば、体言がないので何についてそのように感動しているのか、初句の段階では不明である。

〔資料6〕

あぢきなや／我が名は立ちて唐衣身にもならさでやみぬべきかな(拾遺・恋二・703)

この歌の初句「あぢきなや」、すなわち理屈に合わず、どうにもならないといっても、何についてそう思うのかわからないので、とにかく「あぢきなし」という思いだけが表出される。

このように、初句切れの初句は、体言を含まない述語文節のみの1文で構成されているために、3句切れなどに見られるように、何をどのように理解したかではなく、表現主体の思いが強く表出していることが、特徴として挙げられる。

とすれば、初句切れの成熟が遅れた原因として先にあげた量的な問題は、結局は、初句の露わな情意の表出が、理知的な古今集的表現とは異質であったという、質的な問題に結びつくことになる。

4.2 初句の切れ

このような情意の強い表出は、切れの形となっても現れる。

要求文のほとんどは、「思ひきや」のように文末に「や」があるか、動詞の命令形（「思ひやれ」「思ひ出でよ」「かきくもれ」など）かで、強い調子で切れる。先に挙げた資料4「鳴きわたる雁の涙や落ちつらむ」のように、文中に係助詞があるような疑問文はない。文末に助詞のない「いかにせむ」という用例もあるが、後拾遺集で急増した要求文の中で「いかにせむ」「いかがせむ」は1例ずつしかない。また、感動文は、ほとんどが詠嘆の終助詞で終わるものばかり（「あぢきなや」「あさましや」「ちぎりきな」など）である。いかに、文末の切れの強さが指向されたかがわかる。

なお、判断文ではあるが、古今集に1例、後撰集では3例も見られた「人はいさ」が、拾遺集以後見えなくなるのも、述語の省略と、「いさ（さあどうだか）」の曖昧さと、という切れの悪さが嫌われたのが一因ではないか。

こうした要求文と感動文とには、初句の切れを深くすることで、初句の独立性を高め、第2句以下との対立構造を確固たるものにする働きがあるだろう。

4.3 初句と第2句以下の関係

このような初句切れの初句と第2句以下との関係は、3句切れの上句と下句のような理知的な関係とは異なってくる。

ここでまず考えなくてはならないのは、やはり国語の語順としては本来最後に置かれるべき述語が、初句切れでは、冒頭にあるということであろう。そこで、必然的に述語の対象・内容が、第2句以下で述べられることになる。

〔資料7〕

あさましや／見しかとだにも思はぬにかはらぬ顔ぞ心ならまし（拾遺・恋五・949）

この歌は、第2句以下のはっきり見たとも思えない女の顔が、常に同じように浮かぶという理屈に合わない現象が、女への執着心で起こる、そういう心のあり方を、初句で「あさましや」と詠嘆する。

このように、初句に位置する述語の対象や内容が、第2句以下で示されるのが、初句切れの典型的な構成といえる。

これは、すぐに思いつくようにいわゆる倒置法に直結する。古今集や後撰集では、初句が要求文・感動文である用例の内、後撰集の「いかにせむ／をぐらの山の郭公おぼつかなしと音をのみぞなく」（後撰・夏・196・藤原師尹）を除くすべ

てが倒置と見なせる。初句切れが倒置と関わりが深いことはこれまでも言及されてきたが、それは今述べた初句のあり方からごく自然なことなのである。

〔資料8〕

隠岐の国にながされて侍りける時によめる

思ひきや／鄙（ひな）の別れに衰へて海人の縄たき漁りせむとは（古今・雑下・961・小野篁）

糸井氏は、初句切れの倒置について、資料8を用いて、「2句目以下が、倒置的に、初五の動詞の内容（対象）を表現する。そして、過去の状況と現在の状況とを重ねるように表現しているのである。」と説明される[8]。

糸井氏が「倒置」ではなく「倒置的」と慎重な物言いをされるように、資料8を、

〔資料9〕

鄙の別れに衰へて海人の縄たき漁りせむとは思ひきや

と、一般の語順に補正して、両者の表現を同じとすることは、むろんできない。

資料9では、表現主体が「漁りせんとは」の「は」に込めた感動の表現は、主題を提示する係助詞に過ぎなくなる。また、資料8では、初句「思ひきや」によって、思いもしなかった現在の状況に対する動揺が、冒頭で示される。その印象を背景として、第2句以下があるわけである。このように初句切れでは、初句で示される情意が全体の印象を決定づけるという、表現効果がある。しかし、語順を補正した資料9では、そうした表現効果は消えてしまう。

こうした考え方を徹底すれば、塚原氏が指摘したように、資料8の末尾の「は」は係助詞ではなく、詠嘆の終助詞ということになる[9]。

さて、初句が述語文節のみで体言がないことは、第2句以下に述語の対象や内容が何であるかに、焦点を絞ることにもなる。殊に初句切れのように、表現主体の思いが強く表出されると、読み手はその分強い刺激を受けながらも、要求や感動の対象が明示されないので、いっそう表現主体の思いがどこに向かっているかに、興味の焦点が絞られる。第2句以下は、その答えを示すことになるわけである。典型的な初句切れは、第2句以下にいわば強い吸引力を持っているといえる。

資料8で言えば、突然「思ひきや」と歌が始まるから、読み手は「何を」と驚き、疑問を持つ。第2句以下は、それについて答えるという仕組みになっている。さらに、「思ひきや」は反語で、疑問の形式をとりながら表現主体自身はすでに確信的に判断を下しているはずである。そのため、「思ひきや」の対象や内容がわからなければ、読み手はいっそう第2句以下への関心が強まる。

糸井氏は、第2句以下が初句の対象・内容を表現する対立的表現の効果を、資料10のような初句で主題を示し第2句以下で説明する、題述構文の構造的関係と類似的だとされる。広義の初句切れである。

〔資料10〕

わが恋は荒磯（ありそ）の海の風をいたみしきりに寄する浪の間もなし（新古今・恋一・1064・伊勢）

第2句以下に述語の対象や内容に焦点が絞られる初句切れの構成は、初句が「

問い」であり、第2句以下が「答え」と見なしうる。まさに「AはBだ」という題述構文に類似する。

これまであげてきた初句切れの用例からも明らかなように、古今集的表現の眼目である理知性は、初句切れでは専ら第2句以下で示されることになる。

5. 詞書と贈答

初句切れの和歌に特徴的なこととして、贈答歌が多いことがあげられる。贈答歌では場面の説明が必要だから、いきおい詞書も多い。

詞書から確実に贈答歌とわかる歌は、後撰集が10首中9首（90%）、拾遺集が15首中4首（26.7%）、後拾遺集が34首中25首（73.5%）である。題知らずや詞書に明示されていない歌でも、贈答歌の可能性が高いものが多い。

たとえば、古今集の全2首では、630は後撰集に重出し（資料2の634）、そこでは答歌である。もう1首は資料8の961だが、同じように作者小野篁が隠岐に遠流されたときの歌（407）から、都の人に贈られた可能性は高い[10]。初句を「おもひやれ」と命令形にする本文もある[11]。

拾遺集は贈答歌が相対的に少ない。これは、佐藤和喜氏が指摘された、自分のの心情を自ら把握しようとする対自的傾向の現れとも考えられる[12]。

ただ、「忘るなよ／わかれぢに生ふる葛の葉の秋風ふかば今帰りこむ」（拾遺・別・306）は、初句から明らかに贈答歌だろう。907、1285は、それぞれ後撰集（資料3）、後拾遺集（890）に、贈歌として重出する。これを入れれば、拾遺集でもほぼ半数が贈答歌となる。

このように贈答歌が多いのは、やはり初句切れが、初句すなわち冒頭1文が述語文節1つであることに起因するだろう。読み手に最初に与えられる情報が限定されたうえに、述語の内容・対象が示されないのであるから、偏重した情報でもある。要するに、初句切れの和歌は突然始まることになる。したがって、場面を予め知らないと理解が難しい。

そのため、話し手と読み手とが場面を共有する贈答歌がいきおい多くなるのだろう。その場に居合わせない歌集の読み手は、詞書を通して場面を共有することになる。

6. まとめ

これまで述べてきたように、古今集から後拾遺集の初句切れの典型は、初句が体言を含まない述語文節1つで構成される、要求文か感動文かであり、第2句以下が初句の用言の対象、内容となる。

述語文節のみで成り立ち、体言を含まない初句は、第2句以下で示される述語の対象や内容に、焦点を絞ることになる。また、初句の強い情意は、全体の印象を決定づけることにもなる。

初句切れは、新古今集でその成熟を迎えるが、初句切れの典型となる要求文と感動文が、新古今集のように7割程度になるのは、拾遺集からである。

また、新古今集の初句切れの典型例に、第2句文が体言止めになる、資料11のような用例がある。

〔資料11〕

帰雁を

わするなよ／たのむのさはを立つかりもいなばの風の秋の夕暮（新古今・春上・

61・藤原良経）

こうした用例が初めて出てくるのが、後拾遺集である。

〔資料12〕

長楽寺に住み侍りける頃二月ばかりに人のもとに言ひつかはしける

思ひやれ／霞こめたる山里の花待つほどの春のつれづれ（後拾遺・春上・66・上東門院中将）

こうした点から、後拾遺集の頃には、新古今集の初句切れの原型ともいうべきものができあがっていたと考えられるだろう。

和歌の表現史における初句切れの考察には、当然新古今集について十分検討する必要がある。しかし、初句切れの表現構成上の特徴は、すでに古今集から見られる。そこで、本論では新古今集の原型が見られ、初句切れの画期の一つと見なせる後拾遺集までを資料として考察した。

古今集から後拾遺集までとしても、初句以外に句切れのあるものや、広義の初句切れである題述構文や「見渡せば」を初句に据える歌、初句の類型化など、なお検討すべき課題は多いが、後考に俟ちたい。

註

1）糸井通浩「第三句の機能」（糸井通浩・吉田究編『小倉百人一首の言語空間　和歌表現史論の構想』世界思想社。1989年11月）、「句切れ」（『國文學　古典文学レトリック事典』。1992年12月）。

2）和歌本文は『新編国歌大観』による。ただし、表記は私に改めた。「／」は、句切れを表す。和歌の末尾の（　）内に、歌集名・部立・新編国歌大観番号・作者名を記した。また、（　）内の詞書は、前の歌に付された詞書が、当該歌にも掛かっていることを表す。なお、詞書・作者名がないものは、題知らず・読み人知らずである。

3）山崎孝子「和歌の韻律」（和歌文学会編『和歌文学講座1　和歌の本質と表現』桜楓社。1969年12月）。

4）塚原鉄雄「文の種類」（塚原鉄雄・東節夫『よくわかる国文法』旺文社。1974年2月）。

5）塚原説では、「いかにせむ」など文中に疑問の副詞などがある場合についての言及がない。疑問の副詞は疑問の係助詞同様、結びは連体形になるから、ここでは疑問文として処理した。

6）小松光三「反語」（山口明穂・秋本守英『日本語文法大辞典』明治書院。2001年3月）。

7）秋本守英「古今集の文法」（山口明穂編『国文法講座4　時代と文法―古代語』明治書院。1987年3月）。

8）糸井通浩「初句切」（『國文學　古典文学レトリック事典』。1992年12月）。

9）塚原鉄雄「特殊な文」（塚原鉄雄・東節夫『よくわかる国文法』旺文社。1974年2月）。

10）窪田空穂『古今和歌集評釈』（東京堂出版。1960年6月）、松田武夫『新釈古今和歌集』（風間書房。1975年11月）などが、当該歌が都人に当てた贈歌とするか、その可能性を指摘する。

11）西下経一・滝沢貞夫編『古今集校本新装ワイド版』（笠間書院。2007年11月）によれば、雅経筆本崇徳天皇御本・

志香須賀文庫本が「おもひやれ」である。

12）佐藤和喜「拾遺集歌の構造」「拾遺集歌の生成――十世紀後半の新傾向をめぐって――」（『平安和歌文学表現論』有精堂。1993年2月）。

（付記）

本稿は、表現学会50周年記念大会における発表をもとにしたものである。席上、中島一裕氏・多門靖容氏・野浪正隆氏・糸井通浩氏から懇切な御教示を賜りました。銘記してお礼申し上げます。

なお、本研究はJSPS科研費24520259と平成25年度長野高専特別経費（研究）の助成を受けたものである。

（長野高専）

◇表現研究関連文献紹介

森雄一著『学びのエクササイズ レトリック』（ひつじ書房、平成24年9月刊、￥1,400+）

大き過ぎたり多過ぎたりして想像し難い情報は、周知の何かを引き合いに出して説明される。「東京ドーム何個分」「地球何周分」といった喩えはニュースや新聞でもおなじみのものだろう。こうした表現を入り口に、レトリックの手ほどきをしてくれるのが本書である。

「ぬかに釘」は「効果のないこと」を、「女心と秋の空」は「移ろいやすいもの」を表し、いずれも喩えから成る言い回しである。上位カテゴリーで下位カテゴリーを表す「花見」はシネクドキ（提喩）、ある行為のはじめのプロセスで行為全体を表す「箸をつける」はメトニミー（換喩）に含まれる。「昭和の街角」を「昭和な街角」とすると固有名詞が形容詞的な働きを持つ。しゃれは専ら人を笑わせるために生み出されるが、「電話はよい風呂（4126）」「いいくに（1192）つくろう鎌倉幕府」などの語呂合わせは、数字を記憶するためことばへの意味づけが行われている。ごく日常的に用いられるこうした表現のしくみを、理解を深めるタスクを交え、平易なことばで解き明かす。

古代ギリシャに起源を持つレトリックは、言語に「美的効果」のみならず「説得効果」をも与える技術として発展してきたことを踏まえ、アリストテレス『弁論術』を紹介する。さらには広告に潜む詭弁や、ネーミング論にも目配りがなされている。大学1・2年生向けテキストとのことだが、広く一般にも薦めたい一冊となっている。

（水藤新子）